

秋津

徳山 中村 和行

蜻蛉（トンボ）の季節がやってきました。トンボは前に前にと飛び、決して後ろに下がることはしないため、戦国時代の武将は「勝ち虫」と呼び、トンボを縁起の良いものとしての兜などにつけていました。加賀百万石の基礎を築いた戦国武将の前田利家も兜にトンボをかたどった前立をつけていました。

トンボと日本人との歴史は古く、トンボを秋津（あきつ）と呼んでいました。『日本書紀』によれば、神武天皇が大和の地で即位の折に国見をされて、「あきつの臀帖（となめ）（交尾）せる如くあるかな」と言われたことから、日本の国（本州）はトンボの交尾のような形をしているために日本の異名を「秋津洲（あきつしま）」と呼ぶようになったとのこと。

（神武紀より。原文「皇輿巡幸因、登腋上嚙間丘、而廻望国状曰、妍哉乎国之獲矣、雖内木綿之真咋国、猶如蜻蛉之臀帖焉、由是始有秋津洲之号也」。）

因みに、イトトンボの交尾はハート型です（写真）。



イトトンボの交尾
（Wikipedia：イトトンボより引用）

蜻蛉はカゲロウとも読みます。カゲロウの由来は、太陽の光で熱くなった地面が揺らいで見える現象を「陽炎」と呼びますが、カゲロウの飛ぶ様子に似ています。また、カゲロウの命が短いことから「陽炎」のように儚いことから由来になっているようです。カゲロウはトンボとは見た目は似ていますが、生物学的な分類では、カゲロウはカゲロウ目に、トンボはトンボ目に属し、異なる昆虫です。

最近のNHKの大河ドラマで平安時代の人々が紹介されていますが、藤原道綱の母によって書かれた『蜻蛉日記』の中には「あるかなきかの心地するかげろうの日記とすべし」という文章があります。道綱の母は、身分の高い人と結婚したものの、一夫多妻制により夫の愛を一心に受けることができなかった辛い思いを次のように綴っています。

うたがはしほかに渡せるふみ見れば

ここやとだえにならむとすらむ
嘆きつつひとり寝（ぬ）る夜のあくる間は

いかに久しきものとかは知る
げにやげに冬の夜ならぬ真木（まき）の戸も

おそくあくるはわびしかりけり

今は、一夫一妻制ですので、道綱の母のような思いをする女性も少ないと想像しますが、最近のゴシップ記事には「不倫」という言葉が風鈴の音のように溢れています。自然界では、アホウドリのように、一度つがいになると一生添い遂げ、種を守る生き物もいます。

お隣の韓国では少子化（出生率の低下）が深刻ですが、日本でも出生率が 1.2 となり、日本政府が打ち出している政策が成功しないと我が国も隣国と同じ道をたどると官房長官は警告を発しています。国と民族の消滅を防ぐには最後のチャンスと言っています。

まことに大変な時代です。昭和 30 年代には小学校の教室には芋の子を洗うように子供がいました。もう引き返すことはできないのですから、若い世代に頑張ってもらわなければなりません。高齢者には生物学的に極めて困難なタスクですから、若い世代のアホウドリを支えなくてはと思う次第です。

